

レポート Report

大磯町郷土資料館だより
2010・10・30

31

目次

- 2 企画展「受け継がれる祈りのかたち 一六所神社神像特別公開」
- 6 「元祖海水浴場・大磯 一東京中のしゃれた奴らがやってきた！一」展をふりかえて
- 9 2010 アカウミガメ孵化確認の記録
- 10 平成22年度博物館実習生による
「甦るモノ心～今、その良さが見直されているモノたち～」展／資料の寄贈



左：木造女神形立像／右：木造武装神形立像（神奈川県六所神社所蔵）

企画展「受け継がれる祈りのかたち —一六所神社神像特別公開—

はじめに

大磯町郷土資料館では平成22年10月17日から12月5日まで秋季企画展「受け継がれる祈りのかたち—一六所神社神像特別公開—」を開催いたします。今展示では六所神社や国府地区に受け継がれる文化財を集め公開をしています。

大磯町国府本郷の六所神社が所蔵する木造武装神形立像、木造女神形立像は、大磯町内では初めての展示となります。ここでは木造武装神形立像、木造女神形立像の詳細な概要や造像の背景などを考察していきます。

まず、略歴をご紹介しますと、両像は平成18年に初めて調査がなされました。同年、神奈川県歴史博物館の特別展「神々と出逢う—神奈川の神道美術—」（注1）にて初めて一般公開されました。

そして、同年に大磯町指定文化財に、平成21年に神奈川県指定重要文化財に指定されています。



木造武装神形立像

法量・形状・品質構造・保存状態

下記の調査は平成20年10月に大正大学副島弘道教授と

筆者によって行われた記録を編集したものです。

木造武装神形立像の法量は、本体 像高75.0cm（現状）、面長8.0cm、面幅8.3cm、耳張10.5cm
台座 高9.8cm、幅34.7cm、奥25.8cm

形状について、頭部は、髻（亡失）を結び、顔をやや左に向ける。天冠台（文様は紐一条の下に列弁文）をあらわす。頭髪は天冠台下、正面はマバラ彫りを施し、その他は平彫りを施す。腰を左にひねる。右足を少し踏み上げて立つ。耳朵紐状。耳穴はなし。瞼目。閉口。鬢髪を左右耳の前で巻く。大袖の衣を着け着甲する。表甲を着け、その上部に横に布を巻き正面で結ぶ。胸甲をつける。襟甲、帯喰い付きの前盾をあらわす。腹部は腰甲、腹帯を着用する。袴を着け膝あたりで紐で結ぶ。両肩に天衣を纏う。天衣は肩から両腰で腹帯に絡げ、下腹部をわたる。両腰脇に垂下する。脛あてを着ける。沓を履く。



木造武装神形立像（頭部）

品質構造については、ヒノキ材の一木造りで造像される（両足納までふくめる）。木心は後方に外す。体部背面から内削りを施す。その上に背板をあてる（42.0×12.3）が現在は亡失する。頭頂に1.5×1.0の角枘穴が確認できることから別材を削ぎつけるか。両肩以下は別材を削ぎつける。削ぎ面に直径1.5cmの丸枘穴があり。釘跡あり。右足先を削ぐ。両膝上の表甲の縁を削ぐ（亡失）。表面は布貼り。錆漆下地を施し、黒漆塗り、彩色及び漆箔を施す。天冠台、鏡の縁、脛あて正面に漆箔が残る。肉身には赤色の彩色を施す。保存状態は髻、背板、両肩以下、右足先は亡失する。天衣の遊離部、垂下部が欠失する。大袖の衣の裾後側下、後補と思われる。表面仕上

げほぼ剥落している。面部の漆塗りはあるいは後補かと思われる。帯喰いは少し削り直しか。左腰に銅釘が残る。虫喰いが確認される（現在も進行中）。

木造女神形立像の法量は本体 像高68.0cm（現状）、面長9.7cm、耳張11.6cm。台座 高9.6cm、幅35.0cm、奥26.0cm

形状は足元が亡失しているものの、正面を向いて直立する姿は現在と変わらないと思われる。垂髻を結び、左右に分けて垂らす。両耳前に髪を垂らし紐で結ぶ。耳朶紐状。耳穴はなし。內衣（うち合わせ不明）を着す。足首までを覆う大袖の衣を着ける。その上に膝までの文の鱗袖を着し腰帯を結ぶ。鱗袖の衣の襟はV字形である。両肩から両肘の脇に天衣を垂らす。左手を下げ、右手屈臂かと思われる。



木造女神形立像

品質構造はヒノキ材の一木造りで造像される。木心は首の後に籠める。体部背面から内削りを施して、背板（亡失）をあてる。後頭部から内削りを施し別材を当てる（亡失）。背削内は丸のみで荒く削る。後頭部内は平のみで平らに削る（これは後の仕事の可能性がある）。背板を留めた鉄釘が現在8箇所確認できる。左肘から左

袖前半天衣を纏う。右前膊上側各刻ぎつける。刻ぎ目に直径1.0cmの丸穴が確認される。錆漆下地を施し、黒漆、白下地を施した後、彩色を施す。

保存状態は後頭部蓋板、背面背板、台座、左肘以下、右前膊上側の刻ぎ木を亡失する。表面は下地を一部残し、ほとんど剥落している。髻上部などに虫喰い（現在も進行中）が確認される。背削内に木製の支柱を立てる。新補の方座にたてる。



木造女神形立像（頭部）

像の考察

この2体の像は一本造の構造などから古様の表現が見られるものの奥行きが少ない体型や穏やかな彫法から平安時代後期、12世紀頃に造像されたと考えられます。

木造武装女神形立像、木造女神形立像の面部の表現に大きな特徴があります。これについて薄井和男氏はその面貌は若い青年相にして、眉をひそめ、やや上唇をとがらせ、怒りとも苦悩ともつかない不思議な表情をたたえている。通常の天部神将像とは明らかにちがう。神像に特有の異相表現が加わったと解釈される、としています。

また木造女神形立像については、面相は眼を伏せ、上唇をややとがらせ、瞑想あるいは苦悩ともとれる不思議な表情を示し、木造武装女神形立像と同様な異相表現が指摘される、としています（注2）。

このように両像ともに苦悩のようにみえる面相をしていてと見えています。しかしこの像の保存状態が良くないこともあり、眼部や眉が多くの部分に渡って削られています。その所為もあり若干印象が変わっているようにも感じられるのです。女神像はとくにそのようですから、

これよりも穏やかな表情を持っていたとも考えられるでしょう。

また、この像が何を表しているかということについてはいくつかの考察ができます。平安時代後期より六所神社に伝来したとするならば社伝でもいわれるように六所神社の祭神である櫛稲田姫命と素戔鳴尊を表したものであることが考えられます。神像を表す場合に武装形の表現を用いることは珍しいですが、日本神話のなかで素戔鳴尊と櫛稲田姫命は八岐大蛇の生贄となる櫛稲田姫命を救い、八岐大蛇を倒すという神話があることから武装した神として素戔鳴尊を表すことは不可解とはいえないでしょう。

ただし、木造武装神形立像は四天王、木造女神形立像は吉祥天などの天部といわれる仏像と形状が似ています。仏像として造像される例として毘沙門天と吉祥天のように一対で表される例が多数確認されています。そのことはこの像を考察する上で考慮しなければなりません。

時代考証と造像背景

前項では作風からの検討を行いました。それでは、この時代の六所神社や地域についての資料から考察を行います。六所神社の成立については詳しい事は分かっていませんが、社伝では出雲地方から柳田氏族が移り住んだといわれる地であり、柳田郷と名付けたとされています。彼らの神を祀った神社が六所神社の前身である柳田明神です(注3)。柳田明神がいつから六所神社と称されたのでしょうか。六所社は(相模)国内の天神地祇六神を勧請し祀ったもので惣社の前身的な性格を持つ社です。六所社は国府のあった地に鎮座するのが常であることから同時に惣社である事が考えられます(注4)。六所神社の名は相模以外にも武蔵、下総、出羽、出雲などでもみられます。社名は六柱の神を祭神とすることによるものと考えられます。ただし、創建当初から六柱を祭神としていた場合(例えば、国府の惣社として神社を建立する)、都合により六つの神社を合祀した場合などがあります。

神奈川県六所神社の場合は上記の後者にあたり、元は柳田明神と称していたところに、寒川神社、川匂神社、比々多神社、前鳥神社、平塚八幡宮の神を合祀したことで六所神社の名称を使用する事になったと思われる。

蓮花院所蔵の『六所明神之縁記』や『新編相模国風土記稿』によれば、六所神社の別当寺は真勝寺です。供僧は宝前院、蓮花院、王福寺、宝積寺があります。別当寺は、江戸時代以前に神社に付属して置かれた寺のことで、神前読経など神社の祭祀を仏式で行う者を別当(社僧)と呼んだことから、別当の居る寺を別当寺といわれるようになりました。

真勝寺は神奈川県大磯町国府本郷に所在する名刹です。大正元年の大火により所蔵文書などが焼失したとされており、寺の創建や歴史についてはほとんど知られていません。江戸時代に編纂された『新編相模国風土記稿』(注5)には以下のように記されています。

真勝寺

相府山遍照王院と号す、古義真言宗、大住郡岡崎、金剛頂寺末六所明神の別当寺なり、開山行基、中興真長、天文十三年三月十一日寂す、本尊大日、及び三尊弥陀心華、の画像を安ず、観音堂 本尊如意輪観音、長一尺一寸、及び薬師長一尺、六所明神の本地仏とす、を安ず、共に行基の作なり、

現在の真勝寺は本尊を如意輪観音菩薩とし、一字の堂宇を祀るだけになっています。これは江戸時代や大正時代の大火が原因と考えられます。この記事で本地仏とされている薬師如来坐像は長一尺(約30cm)となっていますが、現存する薬師如来坐像は約40cmであることから当時とは異なる像である可能性はありますが、別当寺における本地仏は薬師如来像であることが多く、現存する薬師如来像も火災等の後に新しく本地仏として製作されたと考えておかしくはないと思われます。



真勝寺木造薬師如来坐像

また、素戔鳴尊は神仏習合の時代、素戔鳴尊の本地として牛頭天王が祀られていました。その牛頭天王が垂迹したものが薬師如来であるといわれています。そのため、素戔鳴尊が祀られていた六所神社の別当寺には薬師如来が本尊として安置されていたことも考えられます。

さて、六所神社周辺での造像活動についてみていきたいと思います。大磯町寺坂の王福寺には木造薬師如来坐像が安置されています。王福寺薬師如来坐像は平安時代前期（9世紀頃）に造られたと考えられます。像高131.2cmの像で螺髪は植え付け、現在亡失する。髪を一段高く彫る。白毫相を表す（後補）。耳朶環状。三道をあらわす。左手屈臂、左手は坐した左膝の上で掌を仰ぎ、第二から五指をやや曲げ薬壺を載せる。右手屈臂、右手は右胸前で掌を前に向けて立て、全指をわずかに曲げる。衲衣を左肩から右肩に少しかかり右脇を通り縁を大きく折り返し縁を左肩にかける。左足の踵に衣を掛ける。脛の下に波形の衣文をつくる。左足を上にして結跏趺坐する。



王福寺木造薬師如来坐像

次に、大磯町国府新宿の蓮花院には木造聖観音立像が安置されています。蓮花院聖観音立像は平安時代後期（12世紀頃）に造られたと考えられます（注6）。

中尊は宝冠をかぶる。左手は屈臂し腹前で蓮花を持つ。右手を屈臂し、胸前で掌を前に向けて立てる。面部や体部には多くの彫り直しがあり本来の姿は現在とは異なっていたことが考えられます。しかし、彫り口を見ると平



蓮花院聖観音菩薩立像

安時代後期の特徴が見られる古様の作品です。

こうした周辺寺院の造像活動が活発に行われていることは、相模国府が大磯に移設される際にも影響を与えた可能性もあり注目して考えています。そして、六所神社にも仏師の紹介などがされたということもあるのではないのでしょうか。

木造武装神形立像、木造女神形立像はともに伝来や像名などは分かっていません。これからも調査研究を進めていきたいと考えています。

（注1）神奈川県歴史博物館平成17、18年度特別展

「神奈川県神社庁設立60周年記念特別展
神々と出逢う—神奈川の神道美術—」

（注2）神奈川県歴史博物館編

「『神奈川県神社庁設立60周年記念特別展
神々と出逢う—神奈川の神道美術—』図録」
(神奈川県神社庁、平成18年)

（注3）六所神社編『六所神社略史』

（注4）大磯町『大磯町史』第六巻（大磯町、平成16年）

（注5）雄山閣編集局編『大日本地誌大系』
新編相模国風土記稿第3巻（雄山閣、昭和7年）

（注6）大磯町教育委員会編『仏教彫刻調査報告書（大磯町文化財調査報告書第二十集）』（大磯町教育委員会、昭和63年）

（当館学芸員 山口雄志）

「元祖海水浴場・大磯—東京中のしゃれた奴らがやってきた!—」展をふりかえって

はじめに

大磯町郷土資料館では、平成22年7月24日(土)～9月5日(日)まで、大磯海水浴場の歴史を紹介する「元祖海水浴場・大磯—東京中のしゃれた奴らがやってきた!—」展を開催いたしました。

今回の企画展では、大磯海水浴場を主に3つの視点からアプローチしました。①今までにない復元資料、②豊富な絵画・写真資料、③貴重な文献資料から辿る大磯海水浴場のあゆみ、この3点から「大磯海水浴場」を浮き彫りにする展示を試みました。

ビーチの主役「水着美人」

今回、復元資料として、東京家政大学服飾美術学科によって復元された明治時代の裁縫教本と雛形(国指定重要有形民俗文化財)に基づき、明治時代の海水浴着を展示しました。

明治時代のワンピース型海水浴着から、デザインや機能性を追求した結果、明治時代末期から、いわゆるシマウマ水着が流行します。今回、シマウマ水着の実物資料、海水浴場の土産品として販売されていたシマウマ水着を着た東髪の女性が写る絵葉書など、明治から大正期、流行の最先端であった海水浴着に関する資料を展示しました。

今回初めて展示した「美人十二ヶ月」は、いわゆる美人カレンダーです。1月から12月まで、各月の季節イベントに合わせた美人が描かれています。

真夏の8月のイベントは「海水浴」、「海水浴」といえば「大磯海水浴場」ということで、8月のカレンダーには、「八月 大磯乃遊泳」と題し、大磯海水浴場で海水浴を楽しむむら帽子を被ったシマウマ水着美人が登場しています。カレンダーが販売されたのは明治24年。大磯海水浴場開設から間もない明治中期の



明治時代の海水浴着
東京家政大学服飾美術学科制作



「八月 大磯乃遊泳」
(美人十二ヶ月)/当館所蔵

段階で、既に夏のレジャーとして海水浴が、さらには海水浴場の代名詞として大磯海水浴場が、全国的に周知されていたことが分かります。大磯海水浴場は、東京のしゃれた人々の憧れであり、流行の水着は海水浴を楽しむしゃれた女性の象徴であったといえます。

ジョルジュ・ピゴ

「現代の日本—海岸(大磯、堀内)」

東京中のしゃれた連中が海水浴に来る」

豊富な絵画資料のハイライトとして、日本史の教科書に載っている日清戦争の風刺画で知られる仏人風刺画家ジョルジュ・ピゴが描いた大磯の海水浴場を紹介することができました。ピゴの作品は、西洋化を逃る日本人を風刺したものが多くありますが、こちらの作品も御多分にもれずその類です。海水浴のために、こぞって大磯に来る姿を作品のキャプションとして「東京中のしゃれた連中が海水浴に来る」と表わしたのでした。原題は「Le tout Tokio aux bains des mer (直訳:東京中の全員が海水浴場に来た)」なのですが、「Le tout Tokio (東京中の全員)」という箇所には私人的な皮肉が込められています。これを日本女子大学・及川茂教授の妙訳により、「東京中のしゃれた連中」となったのです。かくして、本展の副題が「東京中のしゃれた奴らがやってきた!」と決まりました。

「ピゴが大磯海水浴場に来て作品を残していることを初めて知り、改めて「しゃれた」別荘地として発展した大磯の歴史を発見した」といった声も寄せられました。



ジョルジュ・ピゴ

左「現代の日本—海岸(大磯、堀内)、東京中のしゃれた連中が海水浴に来る。」
右「現代の日本—海岸(磯)、海水浴客の行列」 及川茂氏所蔵

東京から来た上品ぶった部一行様が大磯海水浴場にやってきた。しかし、いざ海水浴を行おうとすると、上半身裸という日本人独自の海水浴スタイルにも関わらず、パランソルを差し、バナ帽は被ったまま。その姿はピゴの目にはエキゾチックに映った。

(当館学芸員 山口由紀子/曾根田貴子)

復元「明治時代の浮世絵に描かれた海水茶屋」

本展では、日本大学理工学部海洋建築工学科観水工学（畔柳）研究室の協力のもと、「持龍館繁栄之図」（明治24年）に描かれた海水茶屋を復元し、体験型展示として紹介しました。

海の家復元プロジェクトを通じて

私達、日本大学理工学部海洋建築工学科観水工学・畔柳研究室では、これまで、日本全国の海水浴場に立地する海の家の実測調査やアルミニウム・竹材による海を家の建設活動を行ってきた。こうした経験を活かした取組みにより、今回の「海の家復元プロジェクト」である日本最古の海の家「海水茶屋」の建設活動を行うこととなった。

私達が復元のもとにしたのは、一枚の錦絵である（写真-1）。明治20年頃の大磯海水浴場を描いたこの錦絵には、暖簾のかかった軒の海の家「海水茶屋」が建っていることが見てわかる。この錦絵から寸法と構造を読み解く事が復元に向けた最初の作業であった。寸法に関しては、明治時代の人々の身長と照らし合わせることで、間口810mm×奥行2250mm×高さ2340mmとした。また、構造形式に関しては、より実物に近い復元を目指し幾度にもわたる学生同士や畔柳教授との話し合いを重ね、完成図面が仕上がるまでに約一カ月の期間を要した。模型製作では、海の家を忠実に再現するため、ヨシズや暖簾などの素材感や表現方法に関して試行錯誤を繰り返した（写真-2）。こうした過程を経て設計した「海水茶屋」であったが、図面に描いたものと実際に建設する建築物の差異、特に、部材の接合方法や紐の結び方などは何度も失敗が続いた。さらに、木材調達から部材加工、施工、解体といった一連のプロセスに関するゼロからの建設活動に悪戦苦闘する場面は多かった（写真-3）。しかし、こうした困難を乗り越えて建設した海の家だからこそ、完成した際は、自分達の手で建設したという達成感と安心感を味わうことができた。「設計-加工-施工-解体」というリアルな建設活動を通じた経験は、建設に携わる多くの人々の思いや「建物を建てる」ことに対する責任感といった、毎日研究室にいるだけの学生生活では学ぶことのできない、かけがえのないものを得ることができた。将来、建設業に携わる私達学生にとって忘れ難い貴重な経験になった五ヶ月間の建設活動であった。



（日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻観水工学（畔柳）研究室／菅原道・吉田晃子）

当館初「企画展：音声ガイド」

今回、企画展音声ガイドをネット上で無料配信し、来館者が事前に携帯音楽プレイヤーでダウンロードをする仕組みを作り、また、数台貸し出し用の携帯音楽プレイヤーを用意しました。

音声ガイドを作成して

夏季企画展開催にあたり、音声ガイド並びに展示図録音声版CDを作成しました「ひびき」です。

今回、資料館のバリアフリーを目指して視覚障がい者向け展示資料を「大磯町点訳サークルきつつき」さんが作成されましたが、それに続くものとして依頼を受け協力させて頂きました。

私達は昭和57年から活動を始め、町内の視覚障がい者の方々向けに「広報おおいそ」等の公共配布冊子を朗読・録音して無料でお届けしています。朗読にあたっては、写真や図表等も詳細に解説するなど、工夫努力してきました。しかし「会場内を誘導案内する音声ガイド」の作成は未経験で、当初は大変戸惑いました。更に「展示図録音声版」作成に至っては、専門用語を含む学術論文、歌舞伎のせりふからの引用など、慣れない文章が多く苦勞しました。しかしながら、当館学芸員と打ち合わせを重ね、何とか期日までに完成させる事が出来ました。また、利用者の方々からの反応も良好と聞き、一同ほっとしています。

これからも技術の向上に努め、より多くの来館者やサイト閲覧者の方々に気軽に利用して頂ける良質なガイド作りに協力していきたいと思っています。

（大磯町録音ボランティアひびき）

「元祖海水浴場・大磯—東京中のしゃれた奴らがやってきた!—」展示資料一覧

展示資料	年代	所蔵先
男女海水浴着 (明治末期) 復元		東京家政大学博物館
写真「海水着」	明治中期	竹永紋子氏
男女海水浴着 裁縫雛形	明治42年 (1909) 頃	東京家政大学博物館
渡邊滋編 「故渡邊辰五郎先生遺稿 渡邊裁縫講義 高等部」	明治43年 (1908)	国立国会図書館
男女海水浴着 型紙		東京家政大学 服飾美術学科
写真「海水着」	明治後期	飯田善雄氏
写真「じいやとお馴染み」	明治中期～ 後期	当館所蔵
シマウマ水着	大正時代	浅井カヨ氏
麦わら帽子	昭和中期	当館所蔵
パラソル	昭和中期	当館所蔵
かき水機	昭和初期	当館所蔵
かぎや 海水旅館 看板	明治中期～ 大正初期	佐藤厚子
竹永仙太郎 海水浴掛 看板	大正末期～ 和初期	当館所蔵
竹永仙太郎 海水浴掛 看板	昭和初期	竹永紋子氏
板子	昭和初期	当館所蔵
浮き輪	明治時代	当館所蔵
海水煎餅型	明治時代	讃岐屋
写真 「讃岐屋虎子饅頭 製造風景」		
写真「海水浴客とじいや」	大正～ 昭和初期	当館所蔵
写真「大磯駅」	明治26年 (1893)	大磯駅
	明治40年 (1907)	
	大正元年 (1912)	
「大磯之海水浴」	明治33年	当館所蔵
「八月 大磯之遊泳」 「美人十二月月」	明治24年 (1891)	当館所蔵
絵葉書 「シマウマ水着美人」	明治後期～ 大正初期	飯田福信氏
写真「水着美人」	明治中期～ 後期	川村恭子氏
大磯町海水浴場 開設50周年ポスター	昭和9年 (1934)	当館所蔵
絵葉書 「照ヶ崎海水浴場」	明治35年 (1902) 頃	飯田福信氏
絵葉書 「大磯海水浴場」	明治時代～ 大正時代	当館所蔵

展示資料	年代	所蔵先
ジョルジュ・ビゴー 「現代の日本— 海岸 (大磯、壺内)、 東京中のしゃれた連中が 海水浴に来る。」	明治22年 (1889)	及川茂氏
ジョルジュ・ビゴー 「現代の日本— 海岸 (続)、 海水浴客の行列」	明治22年 (1889)	及川茂氏
「大磯海水浴富士遠景図」	明治後期	当館所蔵
豊原国周 「大磯龍窟図」	明治24年 (1891)	当館所蔵
歌川国貞 「大磯海水浴対面」	明治23年 (1890)	早稲田大学坪内博士 記念演劇博物館
尾上菊五郎写真 「文芸倶楽部」第3巻11編	明治30年 (1897)	当館所蔵
歌川国貞 「鶴屋館繁栄之図」	明治24年 (1891)	当館所蔵
リチャード・ラッセル 「A Dissertation on the Use of Sea Water in the Diseases of the Glands」 (「眼病における海水の 使用について」)	1762	当館所蔵
ハンテ・ワートル著・ 林洞海訳「薬性論」	安政3年 (1856)	当館所蔵
松本順「海水浴法概説」	明治19年 (1886)	当館所蔵
松本順「通俗医療便方」	明治25年 (1892)	当館所蔵
絵葉書「大磯駅」	明治中期～ 大正時代	当館所蔵
写真「岩倉使節団」	明治4年 (1871)	伊香公資料館
絵葉書「西園寺公望邸」	明治後期	当館所蔵
写真「海水茶屋」	明治中期～ 後期	当館所蔵
海水茶屋暖簾	昭和初期	鈴木敏勝氏
海水茶屋 (明治中期) 復元模型		日本大学理工学部 海洋建築工学科 観水学研究室
海水茶屋 (明治中期) 復元		
暖簾 (明治中期) 復元		当館所蔵
四斗樽	昭和初期	当館所蔵
駅貨室 テーブル・椅子	昭和初期	当館所蔵
アルミの海の家 模型	2004	日本大学理工学部 海洋建築工学科 観水学研究室
アルミの海の家 模型	2005	日本大学理工学部 海洋建築工学科 観水学研究室

2010 アカウミガメ孵化確認の記録

昨年に引き続き、今夏もアカウミガメの孵化が確認されました。2年続けて、そして今年は本町海岸の2箇所でも確認されました。本町において、アカウミガメの孵化が2年連続で確認された記録は文献上見当たらず、また同一年に2箇所の孵化が確認されたのも1990年以来20年ぶりであり、極めて稀なことです。本年の確認状況をお伝えします。

近年、相模湾沿岸の市町ではアカウミガメの産卵が相次いで報告されています。昨年は葉山町、平塚市と本町で確認され、本年6月には小田原市で確認されました。本町においても昨年と同様にウミガメの産卵・上陸があるのではないかと考え、6月中旬にウミガメ上陸の痕跡確認のため町内海岸の巡回調査を実施しました。しかし、足跡は確認できず、また、その後も上陸確認の連絡が来なかったため、本年はウミガメの産卵は無かったと考えていました。

8月18日、予期していなかった孵化情報が入りました。午前9時近くに大磯町観光推進室から大磯町大磯の大磯海水浴場東端の所で、ウミガメの卵が掘り起こされ、散乱していると連絡をいただき、午前10時頃には大磯町環境経済課から大磯町西小磯の海岸に子ガメが這ったような足跡が多数残っているという連絡をいただきました。

最初に連絡をいただいた大磯町大磯の産卵巣には午前10時頃に到着しました。産卵巣の側付近寄ると事前情報のとおり、卵殻が散乱していました。砂中の産卵巣は完全に開けられた状態で、産卵巣内部は壺の内側のような形状を残し、残存しているものは全くありませんでした。

所用のため時間において、午後4時頃から孵化調査を開始。産卵巣付近一帯に散乱している卵殻を集めたところ、卵の個数は67個でした。このうち孵化が確認できた

ものが61個で、残りは孵化前に死亡した個体が入っている卵が3個、未受精卵が3個でした。卵の総数67個について、これまで本町で確認されたウミガメの産卵数はいずれも100個を超えており、散乱の状況から判断して実際にはもっと卵があったのではないかと考えています。

翌日、かながわ海岸美化財団の清掃作業員の方に話をうかがい、前日の8月17日には孵化・脱出した痕跡が無く、最初の脱出が8月18日であったことが分かりました。また、産卵・上陸に関して、6月下旬の可能性が高いことを伝え、当時の状況をうかがいましたが、海水浴場開設間近ではほぼ毎日、付近を巡回していたにもかかわらず、上陸の痕跡は確認できなかったと情報をいただきました。

西小磯の産卵巣へは大磯町大磯での孵化調査終了後に向かいました。午後5時すぎに到着。最初に気づいたことは2本平行して海へと繋がっている足跡の筋の多さでした。局所的に足跡が多く見られる場所から海へは南の方角に約50メートル進めばよいのですが、東西にそれぞれ100数十メートル進んでいる足跡があり、また、海ではなく、丘の方へ歩みを進めている足跡もありました。産卵巣付近の状況を見ると上部の段丘は削られ、西湘バイパスのライトの明かりが直接、差し込む場所でした。ウミガメは夜間に脱出することが多く、脱出後は明るい方を目指して移動する習性があります。足跡の状況から、西湘バイパスの明かりに向かって歩き出し、次第に海の方角が分からなくなってしまったという印象でした。海にたどり着くことができず、海岸でへい死してしまった個体がいなかったか足跡をたどり調べましたが、幸いなことに死体は見つかりませんでした。翌8月19日から24日にかけて、子ガメの脱出が見られたため、しばらく様子を見ようと考え、最終脱出から7日後の8月31日に孵化調査を行いました。調査の結果、卵の個数は121個、孵化したウミガメは113個体で孵化率は93.4%でした。

本年は2箇所で産卵・孵化が確認され、いずれも自然孵化で子ガメは海へ戻っていきました。こうした状況は産卵から孵化に至る経過に関して、良い環境が保たれている証拠となりますが、一方で、西小磯で見られた子ガメの方向錯乱を通して、脱出以降の環境保全に関しては、今後何らかの措置が必要ではないかと考えさせられました。

(当館学芸員 北水慶一)



脱出したアカウミガメ
(山本幸三氏 8月19日午後6時32分撮影)

平成22年度博物館実習生による

「甦るモノ心 ～今、その良が見直されているモノたち～」展

大磯町郷土資料館では、毎年学芸員資格取得を目指す博物館実習生の受け入れを行っています。当館の博物館実習では、資料の取り扱い方法といった学芸員としての必須技術を学ぶだけでなく、実習生たちだけで展示を企

画・実行・完成まで担当する「展示替実習」を行います。

今年は「甦るモノ心～今、その良が見直されているモノたち～」と題して、昭和時代に使用されていた生活用品に焦点を当て、「モノ」の進歩の過程を紹介しています。

世界的な大恐慌の勃発、日本が廃墟と化した第二次世界大戦を経て、驚くべき高度経済成長期へと突入、そして空前のバブル景気の到来と崩壊…。実にめまぐるしい変化を遂げた「昭和」という激動の時代。人々のライフスタイルや価値観さえも変化を求められました。

今回の展示では、時代の変化に対応すべく、デザインや性能を変え、人々をより良い暮らしへと導いた生活用品を紹介しています。

展示をご覧いただき、現在使用されている生活用品が私たちの子孫の代にはどのような変化を遂げているか、想像してみてくださいいかがでしょうか？



【平成22年度博物館実習生】

資料の寄贈 (平成22年1月～9月)

地区	受入先	資料名
高 麗	蒲田 昌子氏	油彩画
大 磯	木村 純子氏	昆虫標本 他
	出縄 政美氏	古文書
	内田もと子氏	写真
	飯田 善雄氏	貝殻 他
	竹永 紋子氏	写真
東 町	麻生フミ江氏	衣服 他
東小磯	新見由美子氏	オビドメ 他
国府本郷	鈴木 正明氏	ハクピシン剥製 他
	加藤 廣美氏	貯蓄債券 他
	吉川 雅明氏	五月人形
国府新宿	鈴木 幸雄氏	「お裁縫乃朶」
	湯口 敏昭氏	土器・石器
二宮町	西山 敏夫氏	ブリカギ 他
平塚市	柳川 正夫氏	イットマス 他
東京都	近藤敬一郎氏	古文書

ご協力ありがとうございました。

編集後記 マンガ編



上:「講館龍繁栄之図」(明治24年-当館所蔵)の一部より

資料館なぞかけ

「大磯の歴史」とかけて、アイドルグループ「嵐」と解く。そのココロは?? どちらも「マツジュン」が活躍します。おあとがよろしいようで…… (y)

Report 一大磯町郷土資料館だより No.31

平成22(2010)年10月15日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1

TEL.0463(61)4700/FAX.0463(61)4660